

旅する Wharton

——MoroccoとOld New Yorkのremotenessとproximity

佐々木 真理

1. 旅の中の人生

幼少の頃より幾度もヨーロッパを旅し、結婚後も船や馬車、そして後年は車を利用してヨーロッパを回り、ついにはフランスに永住しそこで息を引き取ることとなったEdith Whartonは、まさに旅する生涯を送った作家であった。旅への彼女の情熱は、ヨーロッパの伝統や文化に対する幼い頃からの傾倒、私生活上のトラブルからの逃避、大量消費時代に突入していったアメリカ社会への嫌悪といった複数の要因が重なり合って、晩年まで衰えることはなかった。その情熱の軌跡を、我々は、ウォートンが残した数冊の旅行記の中にたどることができる。ウォートン自らが語る“my love of the road” (*A Backward Glance* 857) は、無論、旅行記にとどまらずフィクションへと広がり、旅を通してウォートンが得た視点や育んだ思想はいくつかの小説においてその中心を為していった。

その代表的な例が*The Age of Innocence*だろう。Brian T. Edwardsが詳細に論じているように、1920年に発表された『無垢の時代』は、同じ年に発表された旅行記*In Morocco*で描かれている、ウォートンのモロッコにおける体験を色濃く反映した作品である。¹ エドワーズは、モロッコのハーレムを訪れたウォートンが、閉じ込められた女性たちの姿に触発され、Old New Yorkの慣習に閉じ込められる人々を小説の中心に据えたことを論証している (496)。たしかに、閉鎖的な環境が人の精神に与える影響を描く『無垢の時代』は、ウォートンのモロッコでの体験の強烈さを物語っているといえるだろう。エドワーズはさらに、モロッコにおけるフランスの保護領政策をウォートンが擁護するところに、彼女の“implicit acceptance of French colonialism” (490) を指摘し、それが、第一次世界大戦中のアメリカ合衆国の孤立主義に対してウォートンが表明した批判的立場と表裏一体を為していることを看破する。最初の旅行記*The Cruise of the Vanadis*に特に顕著にみられる、“more

purely Oriental” (44) を探し求める姿や、ヨーロッパ文化への帰還を“back to civilization” (45) と思わず描写するウォートンの姿勢は、Mary Louise Pratt がその著書のタイトルとした“Imperial Eyes”をウォートンも内面化していたことを示している。プラットが主張するように、“travel writing made imperial expansion meaningful and desirable to the citizenries of the imperial countries” (3) であるならば、植民地主義に加担する言説としての旅行記という定義はウォートンの旅行記に当てはまる、というエドワーズの指摘も的を射ているだろう。

だが、ウォートンは一貫して、19世紀に一大ブームとなった植民地主義的旅行記からの脱却にこだわり、自らの旅行記に独自性を持たせることを目指していた。² それは、Schriberが指摘するように、女性の旅行記のテーマが、科学や政治や歴史といった男性の分野に踏み込まないことを要求された時代にあって、より困難なことでもあった (“Edith Wharton and the Dog-Eared Travel Book” 149-150)。³ そのようなウォートンが、最後の旅行記となった『モロッコにて』においては、それまでのフランスやイタリアといったヨーロッパ中心の旅ではなく、モロッコという未知のオリエンタルの国への旅を題材とすることを選び、その上でモロッコから遠く離れた地であるニューヨークを舞台とする小説を書き継いでいったことを考えると、植民地主義を内面化した視点しか持ち得なかったという一元的な解釈ではとらえきれない姿が浮かび上がってくる。本稿の目的は、晩年になろうとしていたウォートンが発表した『モロッコにて』と『無垢の時代』を検証することで、ジェンダー化された植民地主義的な19世紀的旅行記を脱却しようと試みていたウォートンが、二つの作品を連関して執筆する過程で、その突破口となる視座を獲得しようとしていた証を読み解くことにある。人生という旅の終着駅にウォートンは何を見ようと、何を目指そうとしていたのだろうか。

2. モロッコにて

当時フランス保護領であったモロッコの総督、Hubert Lyautey将軍の招きを受けて、ウォートンがモロッコを訪れたのは1917年の9月のことであった。⁴ 長年の親しい友人であるWalter Berryと共に車で3週間かけてモロッコを回った旅は、ウォートンにとって、それまでとは異なる旅となったといえるだろう。その違いは、石井が指摘する、「フランスやイタリアの場合のよう

に、実体験を伴う、膨大な知識に裏付けられた、独自性のある文化論」(54)をウォートンは『モロッコにて』において書けなかった点に如実に表れている。ウォートン自身、“It’s so queer to be going to a country that has next to no books about it!” (398) と述べているが、⁵ 綿密に下調べを行い独自の旅行記を書こうという欧州旅行で見せた野心を、この旅においては持つことはできなかったのである。

しかしながら、それよりもなにより、これまでの旅行記と『モロッコにて』との最も大きな違いは、欧州旅行記におけるウォートンの建築物へのこだわりがここではあまり見られないことだ。もちろん、それは「細かい差異を認識し、解説出来るほどには文化的記号が読めない」と石井が端的に述べる、ウォートン自身の東洋文化に対する鑑識眼や知識の欠如にも原因があるだろう (55)。しかしながら、*Italian Villas and Their Gardens* (1904) や *Italian Backgrounds* (1905) など、それまでに発表された旅行記ではあれほど建築物や内装にこだわりのあったウォートンが、モロッコでは関心を示さなかったという理由はそれだけだろうか。

ウォートンは、建築物を人の精神や思想のメタファーとして作品中に用いることが多い。建物や内装がそこに住む人の品格や教養を象徴するという考えは、インテリアに関する著作 *The Decoration of Houses* における一貫したテーマとなっている。あるいは、*The House of Mirth* における Lily Bart のインテリアへのこだわり、『無垢の時代』における Newland Archer の書斎や Mrs. Manson Mingott の邸宅がそれぞれ彼らの内面を象徴していることにもその考えは表れている。⁶ ウォートン自ら、“neither city [Baltimore and Washington] offered much to youthful eyes formed by the spectacle of Rome and Paris (*A Backward Glance* 782) と自伝で語っているように、幼い頃からのヨーロッパを巡る旅が培った教養は、建物がすなわち住む人の精神を表すというウォートンの思想の基礎となり、欧州旅行記における建築物へのこだわりへとつながっていった。このことを踏まえるならば、『モロッコにて』における建物の描写の希薄さは、ウォートン自身がそれまでの旅行記で見せた、建築物を通してその文化を観察しようとする視座が変化したことの現れとむしろとらえてもよいのではないだろうか。実際、ウォートンは、モロッコにおいて観るべきものは建物にはないとまず主張している。“To Occidental travelers the most vivid impression produced by a first contact with the Near East is the surprise of being in a country where the human element increases instead of diminishing the delight of the

eye” (129) という一節は、ウォートンが西洋人としてこの地を訪れているという自己の立場を正確に把握していることと同時に、ここでは“the human element”にこそ注目すべきだという彼女の主張を明らかにする。そしてさらにウォートンは、

Moroccan crowds are always a feast to the eye. The instinct of skilful drapery, the sense of colour (subdued by custom, but breaking out in subtle glimpses under the universal ashy tints) make the humblest assemblage of donkey-men and water-carriers an ever-renewed delight. (129-130)

と、鮮やかな色彩の服装からモロッコに住む人々の文化の豊かさへと描写を続けていく。服装の色鮮やかさは特にウォートンの目を引いたようで、この後も数々の形容詞を駆使し、目にした人々のいでたちにならず注目している。

では、建築物から人々へと視点を移したウォートンがモロッコで見出したものは何であったのか。それは、建物という囲いの外にあって、建物の助けなしに、すなわち建物に象徴される文明と自然との明確な境界線の助けを借りることなく、“impassiveness” (135) を持って自然と相対しつつ、なおかつ人が威厳を保持することの可能性であった。

As the Sultan advanced we followed, abreast of him and facing the oncoming squadrons. The contrast between his motionless figure and the wild waves of cavalry beating against it typified the strange soul of Islam, with its impetuosity for ever culminating in impassiveness. The sun hung high, a brazen ball in a white sky, darting down metallic shafts on the dust-enveloped plain and the serene white figure under its umbrella. The fat man . . . became, through sheer immobility, a symbol, a mystery, a god. (135)

広い平原の只中に日の光を浴びながら佇むサルタンは、鮮やかな服装の周囲の人間とは対照的な純白の衣装に身を包み、不動のままただそこに在るということで“a long tradition of serene aloofness” (135) を表象していた。

確かに、ウォートンはモロッコでの体験、特にハーレムの訪問に衝撃を受け、まるで“shaft of mine”のような、“the painted sepulcher of the harem” (202) の内に一生を送る“remote and passive eyes”を持つ女性たちの姿にヒントを得て、19世紀後半における、慣習という塀に囲われた閉鎖的なニューヨーク上流社会の女性たちの姿を『無垢の時代』で描いたのだろう。それは、『モロッコにて』における、“I was never more vividly reminded of the fact that human nature, from one pole to the other, falls naturally into certain categories, and that

Respectability wears the same face in an Oriental harem as in England or America” (146) という、モロッコとアメリカやイギリスという場所も文化もかけ離れているにもかかわらず、どこか人々の性質にある種の類似があることにウォートンが着目している一節からも推測できる。外界との接触を断たれた女性たちが、無感動な受動的な眼差しを持ったまま、いわば成長することなく一生を過ごすこと——アーチャーは婚約者の May Welland の姿から思わずケンタッキーの洞窟に住むという、眼が退化した魚を連想してしまっているが (905)、これはそのままハーレムの女性たちのことにも当てはまる。このような閉鎖された環境、そしてハーレムの女性たちを囲い込む塀に象徴される境界は、まさにエドワーズが指摘する、“the double function of a Whartonian door— it excludes and divides as much as it protects” (501) にほかならない。ニューヨークの女性たちを囲む慣習、代々女性たちに受け継がれてきた純潔や貞節といった美德は、ハーレムの囲いと同じく、女性たちを保護すると同時に、女性たちを疎外する境界線でもあった。

しかしながら、ウォートンがモロッコにおいて目の当たりにした、自然の只中であって不動のサルタンの姿に象徴される西洋とは全く異質な文化は、エドワーズが指摘するような扉という境界線によって内と外が分かれた世界の有様だけでなく、境界線そのものの存在意義を、さらに言うならば、境界線がゆらぎ消滅する地点を垣間見せたのではないか。ヨーロッパの王侯貴族のように、壮大な宮殿や邸宅によって内と外を厳格なまでに区別するのではなく、自然の只中に身一つで他者と相対するサルタンの在り方は、建築に象徴される文化を信奉してきたウォートンの価値観を揺るがし、西欧的な境界線の引き方そのものを改めて見直させたのではないだろうか。ゆえに、『モロッコにて』において描写される建物や部屋の内装は、徹底的にウォートンが評価する “occidental ideas of elegance” (137) から逸脱し、それにも関わらず独自の美学を備えているのである。

モロッコでの体験がウォートンに西洋的な価値観を再考させる契機となったことは、モロッコにおける高位の人々の衣装をウォートンがどのように捉えているかという点にも見ることができる。『歓楽の家』では、リリー・バートが身にまとった衣装が大きな意味を持ち、端的に言えば、リリーの服装のきらびやかさはそのままリリーの上流社会における地位や周囲の評価を反映し、リリーが上流社会の階段を下降していくにつれて、服装はみすぼらしくなっていった。あるいは、『無垢の時代』においても、純潔なメイが純白の衣

装を身にまとっているように、衣装はニューヨークの上流社会では複雑な意味を持つ記号であった。しかしながら、サルタンに代表されるように、モロッコでの高位の人々は西洋的な価値観とは異なる意味を服装に付与している。サルタンのハーレムの愛妾たちが“fairy-tale figure”（137）のような出で立ちでウォートンたちを迎えるのに対し、サルタンの娘は“less brilliantly dressed and less brilliant of face than the others,” “her head less jeweled”（139）と愛妾たちよりも簡素な出で立ちで、身分と服装の豪華さが比例するわけではないようなのだ。そして、何よりもウォートンが感銘を受けたサルタンの母は、“though she too was less richly arrayed than the favourites she carried her headdress of striped gauze like a crown”（140）と、衣装の簡素さにも関わらず全身から威厳を放つ人物であった。

ここで重要なのは、ウォートンがサルタンの母を通して、ハーレムの扉が開いたと感じていることである。

As she held out her plump wrinkled hand to Mme. Lyautey and spoke a few words through the interpretest one felt that at last a painted windows of the *mirador* had been broken, and a thought let into the vacuum of the harem. . . . Here at last was a woman beyond the trivial dissimulations, the childish cunning, the idle cruelties of the harem. (140-41)

ここでウォートンは初めて、ハーレムの閉ざされた囲いを打ち破った女性と出会う。さらに着目すべきは、ウォートンがサルタンの母を“the depth of her soul had air and daylight in it, and she would never willingly shut them out”（141）と描写していることだろう。エドワーズが指摘した“a Whartonian door”が、思えば初期の短編“The Fulness of Life”における女性の魂の描写においてすでに登場していたのだとすれば、⁷そして、ウォートンが『歓楽の家』や*Ethan Frome*において扉を閉ざした/閉ざされた女性たちを描き続けてきたのだとすれば、ここにおいてウォートンが初めてハーレムにあって内なる扉を開き、空気と日光を魂に持つ女性と出会ったと感じていることは非常に大きな意味を持つ。

Lewisはモロッコでの経験について、“The Eastern world had again laid its magic upon her, but she had never been more conscious of the irreplaceable Western value of personal freedom”（405）と、ウォートンは西洋文化の価値をむしろ再確認したと結論づけているが、モロッコの“magic”はたしかにウォートンの心に印を刻み、ウォートンの目指す先を変化させていった。モロッコで見

た西洋とは異なる境界線と、扉を開けた女性の姿を、ウォートンはどのように作品内に昇華させていったのだろうか。

3. 1870年代のニューヨークへ

ウォートンがモロッコで目撃したハーレムに囚われた女性たちの姿は、“bodies caught in glaciers keep for years a rosy life-in-death” (880) と形容される Mrs. van der Luyden に始まり、そして、ニューランドによって洞窟魚と比較されるメイの姿など、『無垢の時代』に頻出する、19世紀の古き慣習に囚われた女性たちの中に見ることができる。ウォートンは、扉の奥に閉じこめられている女性たちの存在に気がついている人物として、作品の冒頭ではニューランド・アーチャーを登場させている。ニューランドは、“Women ought to be free—as free as we are” (872) と思わず女性の権利を擁護するような発言を口走るなど、当時としてはリベラルな思想の持ち主であることを彼自身も自覚していた。しかしながら、ニューランドはその思想によって、周囲も変革させようと働きかけることは決してない。そのニューランドが大きく自らの生き方や価値観に変更を迫られることとなるのが、婚約者メイの従姉であり、幼い頃の遊び友達であったエレンとの再会であった。そして、Book One が終わり、ニューランドとメイの結婚式の当日から始まる Book Two の間に、ニューランド・アーチャーは大きく変貌を遂げて読者の前に姿を現すのである。彼の変化はこの小説において非常に大きな意味を持つ。では、具体的に彼はどのように変わってしまったのか。

前述したように、エレンと再会する前のニューランドは、閉じこめられた女性の生き方に興味を覚え、また、そのような状況を創り上げてきたニューヨークの慣習に気がついていてもいたが、それに対して自ら何かを働きかけるということはしなかった。

How this miracle of fire and ice was to be created, and to sustain itself in a harsh world, he had never taken the time to think out; but he was content to hold his view without analyzing it, since he knew it was that of all the carefully-brushed, white-waistcoated, buttonhole-flowered gentlemen . . . (844)

このように、ニューランドは女性の生き方を“miracle”と評しながらも、そのことを“analyze”するわけではない。そして、彼が属するニューヨークの

男性たちが一団となって“New York”を“represent”しているので、“the habit of masculine solidarity made him accept their doctrine on all the issues called moral. He instinctively felt that in this respect it would be troublesome— and also rather bad form— to strike out for himself” (845) と、彼らの考えをそのまま自らの考えとし、そのことに疑念を持つこともないのだ。

したがって、ニューヨークの堀の外へ旅立ち、ヨーロッパで伯爵と結婚した後、不幸な結婚生活から逃れるために再びニューヨークへと舞い戻ってきたエレン・オレンスカ伯爵夫人に対し、最初、ニューランドはとまどいを隠すことができない。むしろ、自分たちの慣習から逸脱した行動や考え方をすることに對し、以下のように苛立ちを覚えるほどだ。

Madame Olenska's pale and serious face appealed to his fancy as suited to the occasion and to her unhappy situation; but the way her dress (which had no tucker) sloped away from her thin shoulders shocked and troubled him. He hated to think of May Welland's being exposed to the influence of a young woman so careless of the dictates of Taste. (850)

この時点でのニューランドは、エレンを“so careless of the dictates of Taste”と見なしていることから明らかなように、ニューヨークを囲う慣習という境界は自分たちを保護してくれる“Taste”であり、エレンはその境界の侵犯者であると考えている。

このようなニューランドの考えは、エレンについての描写が常に異国的な情緒や比喩によって語られる点に反映されている。

The atmosphere of the room was so different from any he had ever breathed that self-consciousness vanished in the sense of adventure. . . . what struck him was the way in which Medora Manson's shabby hired house, with its blighted background of pampas grass and Rogers statuettes, had, by a turn of the hand, and the skilful use of a few properties, been transformed into something intimate, “foreign,” subtly suggestive of old romantic scenes and sentiments. (895-96)

どこか異国の香りが漂うエレンの部屋を訪れるニューランドの姿は、未知の国を訪れ、その国の社会や文化を植民地主義的視点で傍観する西洋の旅行者を彷彿とさせる。それが当時のニューヨークの人々にとっては当然の行為であったことは、“in conformity with the family tradition he had always travelled as a sight-seer and looker-on, affecting a haughty unconsciousness of the presence of

his fellow-beings” (995) とあるように、あくまでも観光客、傍観者として旅をしてきたニューランドの姿に象徴されているだろう。エレンは常にどこか異国を思わせ、ニューランドはあたかも旅先で出会う珍しい文化や慣習を観察するかのように、エレンを観察していたのである。

そのようなニューランドの考え方は、しかしながら、エレンと語り合い交流を深めるうちに、徐々に大きく変換を迫られることになる。例えば、ニューヨークにおけるしきたりについてエレンに忠告をしようとしたニューランドは、その忠告がまるでサマルカンドに暮らすかのようなエレンにとっては、全くの的外れであるように感じる場面がある。そして、そのとき、初めてニューランドは以下のことに気がつくのである。

New York seemed much farther off than Samarkand, and if they were indeed to help each other she was rendering what might prove the first of their mutual services by making him look at his native city objectively. Viewed thus, as though the wrong end of a telescope, it looked disconcertingly small and distant; but then from Samarkand it would. (900)

このように、今までメイと同じ側において、遙か彼方の異国に住むエレンを望遠鏡で観察していたはずのニューランドが、いつのまにか自分とメイの位置が反転し、自分にとって遠くにいるのは実はメイであり、自分はエレンの側にいることに気がつくのである。望遠鏡の向こうの端にいるのは、“Far down the inverted telescope he saw the faint figure of May Welland— in New York” (901) とあるように、メイでありニューヨークにほかならなかった。

Book Twoの冒頭、結婚式の当日、教会でメイを待ちながらニューランドは、自分が周囲の人々とは全く変わってしまったことを感じる。“when everything concerning the manners and customs of his little tribe had seemed to him fraught with world-wide significance” (983) であった時があったのだとニューランドは思い、“real people were living somewhere, and real things happening to them” (983) と、自らの人生が空疎なものに、真実なものではないことに衝撃を受けるのである。それ以降、ニューランドはウェランド家の生活が非現実的に思え、心の扉を閉ざし、彼にとっては空疎と思える生活を続けていく。ニューランドはメイとの結婚生活の中で“I’ve been dead for months and months” (1075) と既に自分が死んでしまっているかのように感じ、“I shall never be happy unless I can open the windows!” (1075) と思わず口走る。ニューランドが安らぎを覚えるのは、エレンとの思い出や充実感を与えてくれる書物など

で構築された、内面の聖域に帰るときだけなのであった。

そして、ニューランドはついにエレンの待つ本当の世界へと、ニューヨークの境界線の向こうへ旅立つことを決心する。しかしながら、そのようなニューランドの思いは、周囲の、そして妻のメイの巧妙な策略によって打ち碎かれることとなる。いったんはニューランドの思いを受け入れたかに見えたエレンの、ヨーロッパへ戻るといふ突然の決意に打ちのめされたニューランドを、さらに徹底的に打ち砕いたのは、エレンの送別のために、ニューランド夫妻が開くこととなった盛大な晩餐会であった。“And the it came over him, in a vast flash made up of many broken gleams, that to all of them he and Madam Olenska were lovers, lovers in the extreme sense peculiar to ‘foreign’ vocabularies. He guessed himself to have been, for months, the centre of countless silently observing eyes and patiently listening ear” (1106) と、このとき初めて、ニューランドは、自分とエレンのことが全て観察されていたことを、メイもそのことを承知していたことを知るのである。ニューランドはいつのまにか、ニューヨークの境界線を侵犯しようとしている存在として、エレンと同じ異国の地に赴こうとしている存在として、ニューヨークから監視され観察される側となっていたのであった。

ニューヨークの慣習という囲いの中の女性たちを観察していたはずのニューランドが、実は観察される対象となっていたという姿から浮かび上がってくるのは、境界線の曖昧さにほかならない。観察する側と観察される側を分かť境界線は不安定なものに過ぎず、反転した望遠鏡のように、いつの間にか両者の関係性は反転する。ゆらぐ境界線をはさんで対峙する内と外の関係が時として反転する可能性があることを模索したのが、小説『無垢の時代』だったのであり、ウォートンがモロッコでみた、西洋とは異質な文化が垣間見せた西洋的境界線の曖昧さは、このようにニューランドの変貌の中に形を変えて表象されることとなったのである。

4.遠さと近さ

『無垢の時代』における観察する側とされる側が逆転する構図は、ウォートンがモロッコでの異なる文化の体験を通して、西洋の文化的優位性を疑わず東洋を未知の異国として訪れ観察する者たちの立場が、脆く傲慢であることを垣間見たといふことの証左ではないだろうか。目の退化した洞窟魚を観

察していたつもののニューランドは、いつの間にかその洞窟魚たちに観察され保護されていたのである。思えば、ニューランドが一瞬捉えたメイの “tragic courage” (957) と “something superhuman” (958) こそが、メイの “her blue eyes with victory” (1112) に象徴される姿こそが、無垢というベールの向こうには空虚さしかないニューランドが誤解したメイの真実の姿であったのだ。ニューランドが見ようとしなかったベールの先には、ウォートンがモロッコのハーレムの中に見出したような、心に空気と光を持つ女性がニューランドを待っていたかもしれなかったのだ。ニューランド自身、“the mystery of their remoteness and their proximity” (1066) を思い、近さが必ずしも理解につながるわけではなく、遠さが必ずしも無理解につながるわけではないと察していたにもかかわらず。

たしかに、1920年に出版された『無垢の時代』がどうしてもなく1870年代へのノスタルジーに囚われてしまっているように、ウォートンは1920年代以降の新しい世代、ニューランドとメイの子供達の率直さと開放的な文化を肯定的に描くことはできなかった。この意味で、本稿で論じてきた『モロッコにて』と『無垢の時代』の中に記されたウォートンの思考の軌跡は、ささやかなものであったのかもしれない。だが、Ammonsが指摘する『無垢の時代』における “the fair child-woman” (152) へと抑圧された女性達の悲劇は、ハーレムにおいて性的には強制的に成熟させられ知的には成熟することを禁じられた女性達の悲劇と重なりあうにとどまらず、そのような女性たちを自分達は観察する側にあると思込んでいる男性達の問題でもあることを、ニューランドの姿は教えてくれるだろう。観察される側を他者として囲い込み、自己と距離を置くことで自己の優位性を保持しようとした植民地主義的眼差しに囚われたニューランドたちの姿を暴露し変容させることが『無垢の時代』の目的であり、ウォートンが無垢の時代の向こうに見出そうとしていたものであったのである。

註

- ¹ Leeは『モロッコにて』においてウォートンが “the sensual intensity” に注目している点から、*Summer*における “the dark eroticism and female passivity” との関連性を指摘している。Leeの517を参照。Wolffも『モロッコにて』と『サマー』及び『無垢の時代』との関連を、ウォートンの未発表短篇 “Beatrice Palmato” も考慮に入れながら論じている。Wolffの288-291を参照。

- ² Schriber, "Edith Wharton and Travel Writing as Self-Discovery," 260-261 と、Wright の 51-71 を参照。
- ³ 旅行記というジャンルにおけるジェンダーの問題については、Bassnett が詳しく論じている。
- ⁴ モロッコにおける旅の詳細については、*Edith Wharton Abroad* の 32-37 を参照。
- ⁵ Bernard Berenson に宛てた 1917 年 9 月 4 日付けの手紙より。 *The Letters of Edith Wharton*, 398 を参照。
- ⁶ 建築や内装に対するウォートンの関心と作品との関係については、Fryer が詳しく論じている。
- ⁷ ウォートンはここで、 "... a woman's nature is like a great house full of rooms: there is the hall, through which everyone passes in going in and out; the drawing-room, where the members of the family come and go as they list; but beyond that, far beyond, are other rooms, the handles of whose doors perhaps are never turned; no one knows the way to them, no one knows whither they lead; and in the innermost room, the holy of holies, the soul sits alone and waits for a footstep that never comes" (14) と、女性の精神を一つの家に喩えている。

Works Cited

- Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America*. Athens: The U of Georgia P, 1980.
- Bassnett, Susan. "Travel Writing and Gender." *The Cambridge Companion to Travel Writing*. Ed. Peter Hulme and Tim Youngs. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 225-241.
- Edwards, Brian T. "The Well-Built Wall of Culture: Old New York and Its Harems." *Edith Wharton: The Age of Innocence. Authoritative Text, Background and Contexts, Sources, Criticism*. Ed by Candace Waid. New York and London: W.W. Norton & Company, 2003. 482-506.
- Fryer, Judith. *Felicitous Space: The Imaginative Structures of Edith Wharton and Willa Cather*. Chapel Hill and London: The U of North Carolina P, 1986.
- Lee, Hermione. *Edith Wharton*. New York: Alfred A. Knopf, 2007.
- Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: A Biography*. New York: Harper & Row, 1975.
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. Second Edition. 1992. London and New York: Routledge, 2008.
- Schriber, Mary Suzanne. "Edith Wharton and the Dog-Eared Travel Book." *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*. Ed. Katherine Joslin and Alan Price. New York: Peter Lang, 1993. 147-164.
- . "Edith Wharton and Travel Writing as Self-Discovery." *American Literature*. Volume 59, Number 2, May 1987. 257-267.

- Wharton, Edith. *The Age of Innocence*. 1920. *Edith Wharton: Four Novels*. College Edition. New York: The Library of America, 1996.
- . *A Backward Glance*. 1934. *Wharton: Novellas and Other Writings*. New York: The Library of America, 1990.
- . *The Cruise of The Vanadis*. 1992. *Edith Wharton Abroad: Selected Travel Writings, 1888-1920*. Ed. Sarah Bird Wright. New York: St. Martin's Griffin, 1995. 39-59.
- . *Edith Wharton Abroad: Selected Travel Writings, 1888-1920*. Ed. Sarah Bird Wright. New York: St. Martin's Griffin, 1995.
- . "The Fulness of Life." *Edith Wharton: Collected Stories 1891-1910*. New York: The Library of America, 2001.
- . *The House of Mirth*. 1905. *Edith Wharton: Four Novels*. College Edition. New York: The Library of America, 1996.
- . *In Morocco*. 1920. New York: Tauris Parke Paperback, 2008.
- . *The Letters of Edith Wharton*. Ed. R.W.B. Lewis and Nancy Lewis. New York: Charles Scribner's Sons, 1988.
- Wharton, Edith and Ogden Codman, Jr. *The Decoration of Houses*. New Edition. New York: W.W. Norton&Company, 1997.
- Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. 1977. Reading, Massachusetts: Addison-Wesley, 1995.
- Wright, Sarah Bird. *Edith Wharton's Travel Writing: The Making of a Connoisseur*. New York: St. Martin's Press, 1997.
- 石井光子「旅行記—文学の世界の旅行者」『イーディス・ウォートンの世界』 別府恵子編著 鷹書房弓プレス、1997年。39-58。